

「盟約」 2

魔道祖師／陳情令

柊 かりん

目次

第十七章 不穩……………	9	第二十三章 弁当……………	73	第三十一章 家族……………	149
第十八章 兄上……………	14	第二十四章 照実……………	81	第三十二章 姑蘇……………	154
第十九章 誤想……………	24	第二十五章 回顧……………	89	第三十三章 陳情……………	173
第二十章 一起……………	29	第二十六章 回来……………	93	第三十四章 忘羨……………	186
第二十一章 忘機……………	57	第二十七章 家規……………	104		
第二十二章 認容……………	64	第二十八章 嫉妬……………	118	◆資料◆	
		第二十九章 約束……………	123	登場人物詳細……………	199
		第三十章 男子……………	143	世界觀設定……………	201

登場人物

【藍 湛（藍忘機）】

「藍忘機」の生まれ変わり。
過去の記憶を持っていて、「一緒にいる」と誓い合った魏無羨のことを探し続けた。

【魏 嬰（魏無羨）】

活発で男勝りな可愛い女の子。
実際の性別は男。
女装を隠して藍湛と付き合っている。
「魏無羨」の生まれ変わり。

【江 澄】

魏嬰の弟のような存在。江厭離の実弟。
魏嬰は良き友でありライバルであり、
唯一無二の存在。
心ひそかに大切に思っている。

【江厭離】

魏嬰の姉のような存在。江澄の実姉。
魏嬰を「阿嬰」と呼ぶ。
魏嬰の幸せを願い、藍湛との交際を
応援している。
「孔雀男」の大ファン。

【藍 渙】

藍湛のことを「忘機」と呼ぶ。

誰よりも弟を案じている、優しい「兄上」。

現藍家の主。

【藍啓仁】

藍湛と藍渙の父親代わり。

家の決まりにめっぽう厳しい。

【聶懷桑】

魏嬰と江澄の学友。

魏嬰を「魏姐さん」、江澄を「江兄さん」

と呼ぶ。

【江楓眠】

虞紫鸢の夫、江厭離と江澄の父。

孤児だった魏嬰を引き取り養育している、

現江家の主。

【虞紫鸢】

江楓眠の妻、江厭離と江澄の母。

夫がほぼ勝手に家庭に連れ込んだ魏嬰を

毛嫌いしている節がある。子供たち、

特に江澄の教育にはすこぶる厳しい。

【孟 瑤】

藍渙の元で働く秘書兼補佐役。

裏の顔があるらしい。

大切な約束を交わして一生を終えた忘義の転生物語。

△女装描写があります。性的表現は少なめです。

△作者の独自設定を含みます。お許しいただける方のみ閲覧推奨です。

△時代設定は「現代」としており、

極力現実味が出るよう、なるべく現地の法律など調べているつもりですが、

演出の都合上、現実とはかけ離れている設定・展開があることをご了承ください。

第十七章 不 穩

「江おじさん、お願いがあるんだ」

しばしの沈黙が訪れた夕食の席で、魏嬰は申し訳なさそうな顔で口を開いた。

箸でつまんだ料理を口に運びかけていた江澄は、思わずそれを取り皿に戻して箸を置く。隣に座る江厭離は弟の異変に気付いたらしく、慌てた様子で自らも箸を置くと、そっと労わるように相手の腕に触れた。

「どうした？」

優しい声で答えたのは、江厭離と江澄の父である江楓眠だ。温かな微笑みを浮かべて見つめる彼に促され、魏嬰は嬉々とした様子で用件を続ける。

「今度の連休で、何日か友達の家泊まって来てもいい？」

「友達？」

魏嬰の言葉に、江澄は思わず口を挟んでしまった。

彼の言う「友達」というものがどういったものなのかは、薄々勘付いている。本人が事実をひた隠しにしようとするので、江澄もこれまでは何も言わず口を噤んできたのだが、一年に一度しかない特別な休日に、わざわざ大切な家族を捨ててまでその「友達」の元へ行こうというのは、どういう見なのだろうか？

「私たちと過ぐすより、彼氏と過ぐしたほうが楽しいとでも言いたいのか？」

薄ら嘲笑めいた笑みを浮かべながら、つい心に浮かんだ思いを口にしてしまった。

彼がここ数か月、名も知らぬ男の元へと通っていることには、江澄も気付いていた。初めは心を許せる女性、あるいは男性の存在が彼を変えたのだと思っていた。魏嬰に、自分以外に心の許せる相手ができたのだとしたら、それ自体は消して悪いことではないと思っただし、自分の肩の荷も少しは軽くなるだろうと安堵した。しかし、彼とその相手が友人以上の深い関係だとは思っていなかった。彼が初めて一人で出掛けた日の格好はあまりにも女性らしかったし、その後も休日

なると、どこかいつもより女性らしい姿で家を出て行ってしまふ。そんな彼に對する疑念は、次第に強まっていた。

ところが先日、屋敷の裏門まで迎えに来ていた人物を見たとき、何か心にすんと落ち着く感情があつた。

——魏嬰はきつと、女の格好をして数年を過ごすうち、心まで男らしさを失つてしまつたのだろう。そんな彼を変えたのは、紛れもなく裏門に現れた容姿端麗の長髪男だ。二人は魏嬰の「なり」を利用して、堂々と世間の目を欺き逢瀬を重ねて続けているのだ。

江澄の挑発するような言葉に、魏嬰はむっとした表情で言い返そうと口を開く。けれど、それより先に声を發したのは江楓眠で、ただ一言叱り付けるように息子の名を呼んだあと、厳しい眼差しで相手を睨みつけた。

「いつかは厄介事を持ち込むと思つていたけれど、思つていた通りだったわね」

押し黙る江澄をちらりと見たあとで、食卓の様子を眺めていた虞紫鸞がついに口を開いた。

「男が『彼氏』を作つて家を出て行くなんて、江家は

世間の笑いものだわ」

言い終えたあと、まるですべてを嘲笑うかのように強く鼻を鳴らす。そんな妻の様子を見て再び叱り付けるように名を呼んだ江楓眠は、困つたような顔でため息をついたあと、ようやく魏嬰へと顔を向けた。

「阿嬰、その……友達というのは、どういう子なのかな？」

どこかためらいがちに話すのは、彼も魏嬰の「友達」という存在が、どういったものなのか気になるからなのだろう。江澄が「彼氏」という言葉を口にしなければ、彼も何も気にせず会話を続けていたのかもしれない。しかし、優しい口調ながらも、敢えてその存在を掘り下げて聞き出そうとするのは、「どうやら穏やかではない」空気を察したからのようだ。彼らしい判断だと思つた。

「俺のことを理解してくれる人だよ。でも、江澄が言うような関係じゃない、本当にただの友達なんだ」